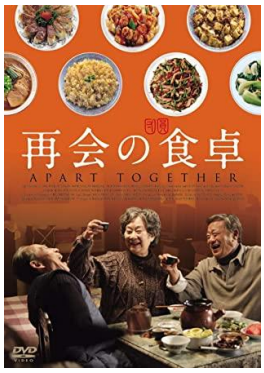
解説

再会の食卓

2020 年 6 月 13 日(土)　日中友好協会湘南支部　映画鑑賞会



2009 年中国制作作品：
（日本公開 2011 年）原題:團圓、Apart Togather）
2010 年度ベルリン国際映画祭銀熊賞（最優秀脚本賞）受賞作品
監督：王金安（ワン・チュエンアン）
原作・脚本:同上
キャスト：ルサ・ルー，リン・フォン，シュー・ツァイゲン，モニカ・モー
上映時間：96 分

［あらすじ］

ある日、上海で暮らす玉娥（ユィアー）のもとに届いた一通の手紙。そこにはかつて生き別れた夫・燕生（イェンション）が 40 数年ぶりに台湾から帰ってくると記されていた。しかし玉娥（ユィアー）には、すでに新しい夫・善民（シャンミン）と家族がいた。戸惑いながらも男を食事に招き、精一杯もてなす一家。

だが、燕生には元妻に対するひそかな願いがあった。「これからの人生、私と一緒に台湾で暮らしてほしい」燕生の予期せぬ告白に、玉娥の心は揺れ動く。猛反対する娘、自分には関係ないとうそぶく長男、金銭で解決しようとする娘婿。ただ一人、長年連れ添った夫の善民だけは、彼女の台湾行きに賛成するが、彼もまた複雑な思いを胸に抱えていた。円満だったはずの一家がにわかに揺れ始める。はたして、玉娥が下した決断とは・・・。(DVD 解説より)

［解説］

1945 年 8 月の日本の敗戦後、中国大陸では国民党政府と共産党軍が内戦を繰り広げた。1949 年に国民党政府は台湾に撤退した。これによって中国大陸と台湾の間では多くの分断家族が生まれた。この映画の冒頭でも数 10 万世帯が生き別れになったこと、また台湾へ渡った人々の大陸への帰郷が許されたのは、実に 38 年後の 1987 年になってからと説明されている。この間冷戦の時代に大陸側は〝台湾解放〟を、台湾側は〝大陸反攻〟を掲げ、両者間では台湾海峡を挟んで武力衝突もあった。米中関係の改善に伴って両者間でいわゆる〝3 通〟（通信、通航、通商）が実現したのは 2008 年のことである。

この映画は〝上海スピード〟と呼ばれる急発展を遂げた時期、すなわち 2005 年頃に設定されている。燕生は玉娥や孫娘の案内によって当時上海で最高の高さを誇った東方明珠塔に登り、リニアの乗車を体験、浦東地域の発展ぶりを実感するとともに下町情緒がまだ残っている食料品市場などで買い物をする。また玉娥・善民夫婦が長い間住んできた住居が取り壊され郊外の高層マンションに移転することなど、上海の 40 数年の変化とともに、近年の急激な変貌ぶりも描かれる。

作品は、[あらすじ]で紹介されているように中国と台湾の歴史に翻弄された新旧夫婦の物語である。夫婦愛とは？家族愛とは？が主要テーマになっているが、ここでは触れない。ただ人間の感情は国境を越えて理解されるが、表現方法については日本の観客には理解が難しいところがあると思われる。

それにしても〝主役〟である３人の演技が実にいい。若手女優モニカ・モーが演じる孫娘のナナをはじめ他の出演者の演技も光っている。

屋外での送別会

埠頭での別れのシーン

この映画の原題は「團圓」、団らんのことだが、映画では皆が集う食事の光景が多い。その意味で日本語の題名「再会の食卓」はぴったりだ。燕生が作る〝佛跳牆〟（福建料理の伝統的な高級スープ）は実に美味しそうだし、善民が「人間、何をするにしても飯を食べなければ力が出ない」と繰り返す言葉もここでは平凡さを越えて妙に説得力がある。

登場する歌曲について紹介したい。まず日本でもお馴染みの「旅愁」。冒頭で流れまた燕生と玉娥が孫娘とともに親族の幼稚園児が通う幼稚園を参観した際、園児たちが歌っていた。日本に留学した詩人・禅僧の李叔同によって訳詞され中国では「送別歌」、文字どおり別れの歌として愛唱されている。台湾の作家・林海音の自伝的小説をもとにした映画『城南旧事』では全編を通じてこの曲が流れている。中国では誰もが知っている曲だ。

また玉娥が歌う「天涯歌女」は 1930 年代に映画『馬路天使』の主題歌として周璇が歌った有名な曲で、その後多くの歌手にカバーされている。因みのこの曲の歌詞者は「義勇軍行進曲」を作詞した田漢である。さらに屋外での食事の際、燕生は世話になったお礼にと、70 年代台湾で流行った「小ぬか雨」を歌い始めた。すると上海特有のスコールに見舞われる。失意のうちに台湾に帰る燕生の気持ちがこれで際立つようになっている。燕生、善民の二人の男が酔いに任せて歌う「シャンペンの香り」も効果的に使われている。

なお蛇足になるが、善生を歓迎する最初の食事会に〝街道委員会〟（正確には居民委員会）の代表として女性が参加し挨拶するシーンがある。居民委員会は行政の末端組織街道弁事処」の指導を受け住民管理を行っている。今回のコロナ禍の際、感染拡大の防止や人々の生活援助面で有効な役割を果たしたとされる。

（岡崎　雄兒）